

一切経音義のサントペテルブルク本Φ二三〇について

李  
乃  
琦

## A Study of the Saint Petersburg Φ230 manuscript

LI Naiqi

The *Yiqiejingyinyi* 一切經音義 (Xuan Ying 玄應) is the oldest Buddhist dictionary that exists in China. In the Tang Dynasty, Xuanzang 玄奘 brought many Buddhist scriptures from India to China. In order to translate these Buddhist texts, a “translation place 訳場” was set up in Chang'an 長安, and intellectuals were selected from among the monks, including Xuan Ying. Xuan Ying was conscious of the fact that there are many difficult words in the Buddhist scriptures, and made the dictionary in parallel with the translations. This dictionary was called *Yiqiejingyinyi*, which has approximately 400,000 characters in a total of 25 volumes, taken from more than 500 Buddhist scriptures and more than 10,000 entries.

By comparing the St. Petersburg Φ230 manuscript with manuscripts preserved in Japan, this paper examines the characteristics of the St. Petersburg Φ230 manuscript.

# 一切経音義のサンクトペテルブルク本Φ二三〇について

李 乃 琦

## 第一節 はじめに

一切経音義（七世紀成立、玄応撰、以下「玄応音義」と略す）は、インドからもたらされた仏典を翻訳する際に、その中に難字難語が大量に存することが意識され、それらについて解釈するための古辞書である。当時、翻訳された仏典の伝播に伴い、玄応音義も広く伝わった。現在残されている玄応音義は版本と写本の二種類である。版本においては、中国の磧砂藏、金藏などがあり、写本においては、日本の古写本とイギリス・フランス・ドイツ・ロシアの敦煌・吐魯蕃断片群（以下、「敦煌断片」と略す）が存する。それらのうち、中国の版本と日本の写本が異なる系統に依拠して成立したということはほぼ定説になった。しかしながら、同じ写本である日本古写本と各国に所蔵されている敦煌断片についての研究はまだ不十分と言える。本論では、日本古写本と敦煌断片に着目し、両者の異同を検討する。

玄応音義敦煌断片において、石塚・池田（一九九二）は原本を調査し、諸本の所在と書誌情報を紹介した。その中で、サンクトペテルブルク本Φ二三〇

〇（以下、「Φ二三〇」と略す）について「前半と後半とで書写年代・内容などを異にするという特徴のある写本である」と論じた。さらに、Φ二三〇の全文を影印・翻刻している。本論では、石塚・池田（一九九二）に基づき、Φ二三〇を研究対象とし、日本古写本との比較を試みる。

玄応音義日本古写本は、玄応音義が奈良時代に日本に伝来した後、各地の寺院で書写されたものである。現在日本古写本はほぼ零本であり、各本によって、残されている巻数も異なっている。Φ二三〇の内容は玄応音義巻第二であるが、日本古写本で巻第二が残っているのは金剛寺本、七寺本、広島大学本、大治本の四種類である。これに完本である高麗本を含めると全五種類ある。（以下、金剛寺本を「金」、七寺本を「七」、広島大学本を「広」、大治本を「大」、高麗本を「高」と略す）

石塚・池田（一九九二）は、Φ二三〇の書式、一行の文字数についての分析を通して、「Φ二三〇の前半は、八世紀中期の書写で、新しい書式になっており本文にも節略や改変が施されているのであるが、後半は、吐魯蕃（八世紀末期から九世紀前半）の書写で、前半の性格を解せず一切経音義の普通の書式と本文を継ぎ足したテキストである。」と結論づけた。また、増訂の有

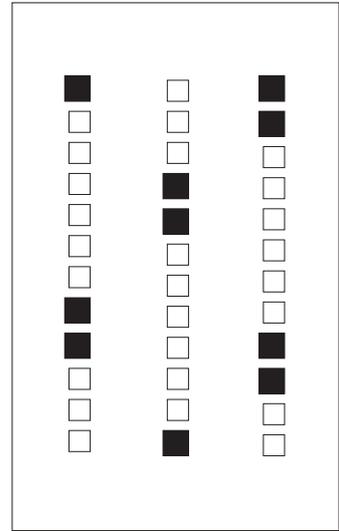


図1 Φ二三〇前半<sup>(2)</sup>

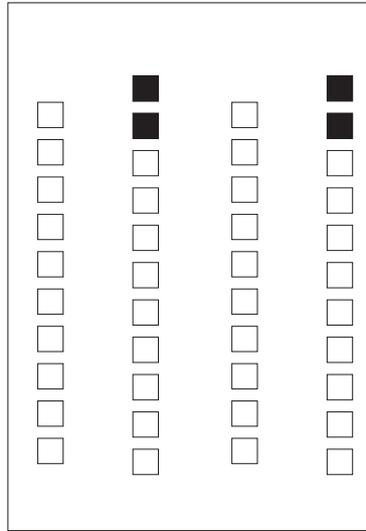


図2 Φ二三〇後半<sup>(3)</sup>

だ行われていない。また、新たに公開されている古写本の金剛寺本、七寺本も研究対象として扱われていない。そのため、本論では、既に分類した玄応音義各系統をΦ二三〇とを照合し、Φ二三〇が古写本のどの系統に近いのかを検討する。

無、反切の異同、注文の節略について論じた。それらの分析に際して、日本古写本の大治本、完本である高麗本と版本の慧琳本と磧砂藏を利用して

いる。

以上、これまでの研究により、Φ二三〇の特徴を述べ、玄応音義日本古写本の一部分との比較を行われてきた。しかしながら、日本古写本の各系統にはそれぞれの独自注文があり、系統間の相違

とΦ二三〇との比較はま

## 第二節 Φ二三〇の前半

前述のように、Φ二三〇は前半と後半とは、内容と書式も異なっている。

図1で示したように、Φ二三〇前半の書式は掲出語(■)が大文字で、注文(□)が小文字で書かれている。また、二つの項目の間に空白を置かず、続いて書写している。それに対して、図2のΦ二三〇後半では、掲出語と注文が同じ大きさの字で書かれ、また、注文が一行以上の場合、二行目の注文を一字下げている。さらに、項目を連続に書写せず、改行している。

内容において、石塚・池田(一九九二)によると、前半と後半には大きな差があるため、本論ではΦ二三〇の前半と後半を別々に分析する。Φ二三〇の前半は「輕躁」から「間問」まで、計八三項目である。

石塚・池田(一九九二)では、Φ二三〇前半の増訂・反切の異同・注文の節略について分析している。その内容をまとめると、次の通りである。<sup>(4)</sup>

・増訂…

① 掲出語は他本に共通するが、注文が他本に見えないΦ二三〇前半の例…「蟠龍」「瘰肉」「因鑽」「趨走」「判合」

② 掲出語を増訂した例だが、注がないもの。同じく補入の例…「剗剗」「臂印」

③ 増訂したと考えられる例、これも補入の例…「自在王領」「三百攢」

・反切の異同…「漑」「髡」「敦」「撓」「髡」「柱」「抉」「王」「鑽」「脱」(全十例)

・注文の節略…「往討」「怡悅」「豌豆」(全三例)

第二節第一項 諸本が一致する内容との比較

先行研究で指摘された内容を除き、Φ二三〇前半の諸本と異なる内容をまとめると、次の通りである。

①「上」「下」「云」「作」の補入

Φ二三〇の項目の掲出語は主に熟語であり、特に二字の熟語が圧倒的に多い。その場合、二字のそれぞれ注を加えた項目もあれば、どちらか一字のみに注を加えた項目もある。さらに、注を加えている字を強調するために、「上」と「下」を補入している。

その他、出典の書名の直後に「云」、異体字の後に「作」を加えて強調している。

②注文の改編

Φ二三〇前半には玄応音義諸本と注文が異なる例が多数ある。次に、その中から二例を挙げて分析する。

例一【麤毘】

Φ二三〇…上他合反。下音登。麤毘細者謂之麤毘。

諸本…他盍反。『釋名』云施之大牀前小榻上所以登上牀者、因以爲名焉。

例一では、傍線部の「上」が注の対象である「麤」を強調するために、補入された内容である。Φ二三〇の反切「他合反」と諸本の「他盍反」の文字表記が異なるが、同音である。また、「下音登」は掲出語の二番目の「毘」

に加える直音注である。最後の「麤毘細者謂之麤毘。」は他の項目から引用された内容である。

例一の掲出語の前に「麤毘」という項目がある。Φ二三〇での注文は「上渠俱反、下山于反。織毛蓐也。經文作麤、力于反。麤、毘也。麤非字體。」であるが、諸本では「渠俱反、下山于反。『通俗文』織毛蓐曰麤毘、細者謂之麤毘。經文作麤、力于反。麤、毘也。麤非字體。」である。例一では、玄応音義本来の注文を利用せず、前の項目の一部分を抽出して利用している。

例二【深穿】

Φ二三〇…古作𠄎、𠄎二形、同。慈性反。謂穿地爲塹、以取獸也。

諸本…古文𠄎、𠄎二形、同。慈性反。『広雅』穿、坑也。『説文』大陷也。『三蒼』穿謂穿地爲塹、所以張禽獸者也。

例二では、諸本の「所以張禽獸者也」がΦ二三〇の「以取獸也」に改編されている。この注文については、意味がほぼ同じである。そのため、Φ二三〇の編纂時に、玄応音義をそのまま書写するのではなく、改編を行っていると言える。

第二節第二項 諸本が不一致である内容との比較

第二節第一項では、玄応音義諸本が一致する内容をΦ二三〇と比較した。第二節第二項では、玄応音義諸本が不一致である内容をΦ二三〇と照合する。

## 1 広島大学本との不一致

玄応音義諸本の中では、広島大学本が他本より注文の内容が少ないのが特徴である<sup>⑤</sup>。本節では、広島大学本を例として分析する。

### 例三【豌豆】

Φ二三〇・上|一九反。經有作宛、又作登、登一月反。二形並非字體。

高・七・大・金・一丸反。『広雅』豌豆、豇豆也。經文作宛、又作登、一月反。

二形並非字體。

広・一丸反。『広雅』豌豆、豇豆也。經文作

例三では、広大本の「經文作」が仏経經文の字体を表す内容であるが、字体についての注文が見られない。これは広大本の誤脱だと考えられる。

また、Φ二三〇には諸本に比べ、「上」「有」「登」の三字が加えられているが、意味は一致する。この例においては、Φ二三〇が広大本を参照した可能性がないことが推測される。

### 例四【艾白】

Φ二三〇・五蓋反。『爾雅』云艾、冰臺。言其色似艾也。

広・五蓋反。『爾雅』艾、臺。言其色似艾也。

高・七・大・金・五蓋反。『爾雅』艾、冰臺。言其色似艾也。

例四では、広大本では「冰」の一字が脱落しているが、他本には見られる。例三と例四より、広大本の卷二が誤脱の写本であることを説明した。ま

た、Φ二三〇に見られる注文が広大本に見られないことで、Φ二三〇の依拠本が広大本ではないと言える。

## 2 大治本系統との不一致

### 例五【欬逆】

Φ二三〇・上枯(欠)反<sup>⑥</sup>。『説文』云欬、逆氣也。『字林』云欬、癩也。經文多

作咳、非今用。

大・金・。咳謂嬰兒也。咳非今用。

高・七・広・枯戴反。『説文』欬、逆氣也。『字林』欬、癩也。經文多作咳、胡

來反。咳謂嬰兒也。咳非今用。

### 例六【編椽】

Φ二三〇・上卓綿反。編織也。謂取棘刺編椽而臥也。

大・金・。謂取棘刺編椽而臥也。

広・卓綿反。『蒼頡篇』編織也。『聲類』以繩次物曰編。謂取棘刺編椽而臥也。

高・七・卓綿反。『蒼頡篇』織也。『聲類』以繩次物曰編。謂取棘刺編椽而臥也。

例五と例六では、大治本系統（大治本と金剛寺本）が玄応音義他本と比べ、注文の字数に大きな差がある。また、他本に見られ、大治本系統にない内容は注文の最後ではなく、最初の部分である。そのため、これらの内容については、大治本系統の脱落ではなく、省略だと考えられる。これにより、Φ二三〇が編纂された時、利用された依拠本が大治本ではないと言える。

### 3 高麗本系統との不一致

#### 例七 【𦍋𦍋】

Φ二三〇…上|渠俱反、下山于反。織毛𦍋也。經文作𦍋、力于反。𦍋、𦍋也。𦍋非字體。

大・金・広・七…渠俱反、下山于反。『通俗文』織毛𦍋曰𦍋𦍋、細者謂之𦍋𦍋。

經文作𦍋、力于反。𦍋、𦍋也。𦍋非字體。

高…渠俱反、下山于反。『通俗文』織毛𦍋曰𦍋𦍋、細者謂之𦍋𦍋。經文作𦍋、力于反。𦍋、𦍋也。𦍋非字體。

例七では、傍線部の内容については、高麗本が「𦍋」であり、他本が「𦍋」である。

説文解字では「𦍋」（卷二）の注文が「陳艸復生也。从艸辱聲。一曰蔞也。凡蔞之屬皆从蔞。蔞、籀文蔞从艸。而蜀切」である。「𦍋」の記述は存しない。

康熙字典によると、「𦍋」は『唐韻』而蜀切『韻會』如欲切、杜音辱。𦍋。『類篇』藉也。『正韻』衲𦍋也。『釋名』𦍋、辱也、人所坐褻辱也。『詩・秦風疏』茵者、車上之𦍋。『後漢・王暢傳』暢常布衣皮𦍋。又『集韻』奴沃切、音辱。『類篇』小兒衣也。」である。

これらによると、「𦍋」と「𦍋」の意味が異なっている。しかしながら、『後漢書・趙岐傳』では、「有重疾、卧𦍋七年。」の記述がある。これは、「𦍋」を「𦍋」として使われた証拠の一例である。

以上により、広大本と大治本系統に注目の脱落と省略が多数存し、それら

の内容がΦ二三〇に見られる。そのため、Φ二三〇の依拠本が広大本と大治本系統である可能性は極めて低い。一方、Φ二三〇と高麗本系統には相異のある注目が多少あるが、異体字を除き、内容がほぼ一致する。Φ二三〇前半の編纂時に高麗本系統に近い玄応音義を利用したと推測できる。

#### 第二項第三節 編纂方針

Φ二三〇前半の成立に際して、全般的に書写ではなく、独特の編纂方針があったと考えられる。その方針を次の二点に分けて分析する。

#### 1 音注の重視

##### A 増訂と改編

石塚、池田（一九九二）で述べられているように、Φ二三〇には増訂項目が二例ある。

例八 【三百攢】…攢宜作積、積鋌也。子箠反。

例九 【自在王頷】…王于放反。

例八には字体注、義注と音注があり、例九には音注のみある。増訂された項目にはいずれも音注が見られる。

例九の「王」は多音字であり、「平…陽韻 雨方切」と「去…漾韻 于放切」を区別するために、Φ二三〇では項目が立てられている。

B音注の位置

例十 【鞞衣】

Φ二三〇…『三蒼』云而用反。又而容反。『説文』云鞞鞞毳飾也。或作毳、而容反、謂古具垂毛也。或作毳、人志反。織毛屬也。三形通、取於義無失。經文作茸、而容反。茸、草茸也。非此義。

諸本…『三蒼』而用反。『説文』鞞鞞毳飾也。或作毳、而容反、謂古具垂毛也。或作毳、人志反。『広雅』毳毳、屬也。織毛曰屬。三形通、取於義無失。經文作茸、而容反。『説文』茸、草茸也。茸非此義。

例十一 【間問】

Φ二三〇…上居竟反。下古閑反。依上音『爾雅』云間、代也。謂間錯相代也。又隔也。依下音。間猶處所也。間中也。

諸本…上居竟反。間、隔也。『爾雅』間、代也。謂間錯相代也。間、乱也。下古閑反。間猶處所也。間、中也。

例十二 【邠坵】

Φ二三〇…上鄙旻反。下直飢反。坵古作埒土示同。邠坵梵言也、正云阿那他擯荼隨。阿那他者、此云無依擯荼隨者、此云團施。言此長者好施貧獨、因以名／欠、本名須達多也。

諸本…鄙旻反。坵、古文埒、同。直飢反。梵言也、正云阿那他擯荼隨。阿那他、此云無依、亦名孤獨。擯荼他、此云團施。言此長者好施貧獨、因以名焉、本名須達多。

例十三 【熊羆】

Φ二三〇…上胡弓反。下彼宜反。熊如豕、羆似熊、黃白色。頭如馬一名、猓々音加。

諸本…胡弓反。『説文』熊如豕、山居冬蟄。其掌似人掌、名曰蹠。羆、彼宜反。『爾雅』羆如熊、黃白文。郭璞曰似熊而長、頭似馬有髭、高腳、猛愍多力、能拔木。關西名猓羆。蹠音扶袁反、愍呼藍反、猓音加。

例十、十三の掲出語はすべて熟語であり、注文では掲出語の二文字に別々に音注を加えている。玄応音義諸本では、注文の形式が「一番目の字の音注＋一番目の字の義注／字体注＋二番目の字の音注＋二番目の字の義注／字体注」である。Φ二三〇では、二文字の音注をすべて注文の最初に掲出し、その後二文字の義注と字体注を記す。

C音注のみ保留

例十四 【其鏃】

Φ二三〇…子木反。大・金・広・七…『字林』子木反。鏃、箭鏃也。江南言箭金、山東言箭足。『釋名』云箭本名、云箭本曰足。古謂箭足爲箭族。『爾雅』「金族箭羽」是也。

高…『字林』子木反。鏃、箭鏃也。江南言箭鏃也。江東言箭足。『釋名』云箭本曰足。古謂箭足爲箭族。『爾雅』「金族箭羽」是也。

例十五 【怨讎】

Φ二三〇…視周反。

諸本…視周反。讎、憎惡也。讎、對也。『爾雅』仇、讎、匹也。怨之匹也。怨偶曰讎。

例十四と十五では、玄応音義諸本には注文の内容が多くあるが、Φ二三〇では反切のみ採録されている。

例十四の傍線部は『字林』と『方言』には見られず、『慧琳音義』に一致する内容が見られた。『慧琳音義』卷第二十六（釋雲公撰、大唐沙門慧琳再加）では【其讎】…子木反。『字林』云…箭鏑也。江南言箭金也、山東言箭足。『釋名』云…箭本曰足。古謂箭足為族。『爾雅』金鏑剪羽是。」とある。これにより、慧琳音義の玄応音義依拠本は日本古写本と同じ内容があると推測できる。

D 「上」「下」の補入

例十一～十三では、音注を注文の最初に改編するのみならず、掲出語の熟語の二文字を弁別するために、一番目と二番目の文字の音注に「上」と「下」を加えている。

2 義注の改編

例一と例二の他に、例十六も改編された項目である。

例十六 【擲石】

Φ二三〇…謂以手投石也。

大・金…案『漢書』甘延壽投石拔拒。張晏注云飛石重十二斤為機、發行三百步。延壽有力、能以手投之也。

広・高・七…案『漢書』甘延壽投石拔距。張晏注云飛石重十二斤為機、發行三百步。延壽有力、能以手投之也。

第三節 Φ二三〇の後半

Φ二三〇は前半と後半が別々に編纂されたもので、本節では、Φ二三〇後半について分析する。Φ二三〇後半は「奎星」から「頼締」まで、全四七項目ある。

第三節第一項 諸本が一致する内容との比較<sup>⑦</sup>

例十七 【難冀】

Φ二三〇…又作覲、同。居致反。冀、也。『說文』覲、幸也。諸本…又作覲、同。居致反。冀、望也。『說文』覲、幸也。

例十八 【怡懌】

Φ二三〇…意怡、懌、樂也。郭璞曰…怡、心之樂也。懌、意解之樂也。大・金・広…音亦。『爾雅』怡、懌、樂也。郭璞曰怡、心之樂也。懌、意解之樂也。

高…音以之反。『爾雅』怡、懌、樂也。郭璞曰怡、心之樂也。懌、意解之樂也。

也。

七・音——怡、憚、樂也。郭璞曰怡、心之樂也。憚、意解之樂也。

例十七では、掲出語の「冀」について加えられている義注である「望」が諸本に見られ、Φ二三〇では脱落している。

例十八では、大治本・金剛寺本と広大本では直音注で発音を表し、高麗本では反切で表している。それに対して、七寺本には「音」の後の音注の注文が脱落している。Φ二三〇では「意」の一字を増訂し、その後義注を掲出している。もう一つの可能性としては、Φ二三〇の依拠本では、二行目の注文が「意解之樂也」であり、Φ二三〇では間違って書写し、二行目の始まりの一字を一行目に書写している。

### 第三節第二項 諸本が不一致する内容との比較

#### 1 広島大学本との不一致

##### 例十九 【坂器】

Φ二三〇…下江反。『説文』似疊、長頸、受十升也。

広…意也。經文作飼、俗字也。

大・金・高・七…下江反。『説文』似疊、長頸、受十升也。

##### 例二十 【手抱】

Φ二三〇…『説文』作掙、掙或作抱、同。步交反。掙、引取也。『通俗文』作掙、

蒲交反。手把曰掙。

広…下江反。『説文』似疊、長頸、受十升也。

大・金・高・七…『説文』作掙、掙或作抱、同。步交反。掙、引取也。『通俗文』作掙、蒲交反。手把曰掙。

##### 例二十一 【法厲】

Φ二三〇…古文礪、同。力制反。磨也。砥細於礪、皆可以磨刀刃也。

広…古文礪、同。力制反。磨石也。砥細作礪、穀芒也。礪非字體。

大・金・高・七…古文礪、同。力制反。磨石也。砥細於礪、皆可以磨刀刃也。

例十九～二十一は、いずれも広大本が前後の項目の注文を間違って書写した内容である。

それらの内容は広大本のみ見られ、他本には見られない。それにより、Φ二三〇の依拠本は広大本とは言えない。

#### 2 大治本系統との不一致

##### 例二十二 【款乳】

Φ二三〇…広・高・七…款乳

大・金…刺乳

例二十二では、Φ二三〇・広大本・高麗本・七寺本の掲出語が「款乳」であり、大治本と金剛寺本の掲出語が「刺乳」である。注文によると「作嗽、

同。所角反。『三蒼』云欸、吮也。『通俗文』含吸曰嗽。經文作、此俗字也。」であり、大治本系統の「刺」は誤写だと思われる。

### 例二十三 【圜廁】

Φ二三〇…『字林』七情反。『広雅』圜、廁也。皆廁之別名也。『釋名』云或曰清、言至穢之處宜修治使潔清也。或曰圜、言溷濁也。

大・金…『字林』…七情反。『広雅』圜、廁也。皆廁之別名也。『釋名』云或曰清、言至穢之處宜修治使潔清也。或曰圜、溷濁也。

広…『字林』七情反。『広雅』圜、廁也。皆廁之別名也。『釋名』云或曰清、言至穢之處宜修治使潔清也。或曰圜、言溷濁也。

高・七…『字林』七情反。『広雅』圜、廁也。皆廁之別名也。『釋名』云或曰清、言至穢之處宜修治使潔清也。或曰圜、言溷濁也。

例二十三では、傍線部の内容が大治本に見られず、他本には存する。これは大治本系統の誤脱だと考えられる。

### 例二十四 【醪煨】

Φ二三〇…案『韻集』音古孝反。酒醪也。謂起麵酒也。經文多作醪、音勞。『三蒼』、『説文』皆云有滓酒也。醪非字體。

大・金…安『韻集』音孝交反。酒醪也。謂起麵酒也。經文多作醪、音勞。『三蒼』、『説文』皆云有滓酒也。醪非字體。

広…案『韻集』音古孝反。酒醪也。謂起麵酒也。文多作醪、音勞。『三蒼』、『故文』皆方有滓酒也。醪非字體。

高・七…案『韻集』音古孝反。酒醪也。謂起麵酒也。經文多作醪、音勞。『三蒼』、『説文』皆云有滓酒也。醪非字體。

例二十四では、大治本の音注が「孝交反」であり、他本が「古孝反」である。掲出語の「醪」は広韻では「去…效韻見声 古孝切」であり、Φ二三〇・広大本・高麗本・七寺本との記述が一致する。「孝交反」と異なっている。そのため、これは大治本系統の誤写だと判断する。

### 3 高麗本系統との不一致

#### 例二十五 【灌綆】

Φ二三〇…(掲出語無し)文…汲井繩也。『方言』韓魏之間謂之綆。<sup>8)</sup>大・金・広…或作觀、同。古亂反。汲器也。綆、格杏反。『説文』汲井繩也。

『方言』韓魏之間謂之綆。高・七…或作觀、同。古亂反。汲器也。綆、格杏反。『説文』汲井繩也。『方言』

韓魏之間謂之綆。

例二十五では、高麗本系統が「之」の一字が脱落している。あるいは、「韓魏之間」と「韓魏間」が同じ意味を表しているので、省略された可能性もある。

#### 第四節 おわりに

以上、Φ二三〇を前半と後半に分け、それぞれを玄応音義諸本と比較した。その結果をまとめると、次の通りである。

- ① Φ二三〇前半は玄応音義を忠実に書写するのではなく、意識的に改編を行っている。
  - ② 玄応音義諸本との比較を通して、Φ二三〇前半と高麗本系統に見られ、他本に見られない内容が多数存する。そのため、Φ二三〇は高麗本系統に近い。
  - ③ Φ二三〇前半の編纂に際して、音注の重視と義注の改編という編纂方針を持っていた。
  - ④ Φ二三〇後半の内容がすべて玄応音義に見られる。すなわち、Φ二三〇後半は玄応音義を書写したものである。
  - ⑤ 玄応音義諸本と比較すると、Φ二三〇後半は高麗本系統を依拠して成立した可能性が高いと考えられる。
- 先行研究によると、Φ二三〇の前半は八世紀の中期に編纂され、後半は八世紀末期から九世紀前半の書写である。本論では、Φ二三〇を玄応音義と照合した結果、Φ二三〇の前半と後半の成立年代は異なっているが、いずれも高麗本系統に近いと結論付けた。玄応音義は七世紀後半に成立した音義書であり、敦煌・吐魯番や日本に伝わった。Φ二三〇には日本古写本の広大本や大治本系統と異なる内容があるが、高麗本系統とほぼ同じである。成立年代から言うと、日本古写本より、Φ二三〇と高麗本系統は玄応音義原本に近い

と言えるだろう。

#### 参考文献

- 池田証寿(一九八四)「一切経音義音注索引」、『古辞書音義集成 一切経音義索引』、汲古書院
- 石塚晴通・池田証寿(一九九一)「レニングラード本一切経音義―Φ二三〇を中心―」、『訓点語と訓点資料』八六輯、訓点語学会
- 上田正(一九三二)「玄応音義諸本論考」、『東洋学報』第六十三卷第一・二号
- 徐時儀(二〇〇五)『玄応「衆経音義」研究』、中華書局
- 張娜麗(二〇〇六)「京都大学文学部国語学国文学研究室蔵玄応撰『一切経音義』について」、『日本古写経善本叢刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五卷」』、国際佛教学大学院大学学術フロンティア実行委員会、二〇〇六年
- 箕浦尚美(二〇〇六)「金剛寺本・七寺本・東京大学資料編纂所・西方寺蔵玄応撰『一切経音義』について」、『日本古写経善本叢刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五卷」』、国際佛教学大学院大学学術フロンティア実行委員会
- 山田孝雄(一九三二)「一切経音義刊行の顛末」、『一切経音義二十五卷』、西東書房
- 李乃琦(二〇一八)「一切経音義全文データベース構築による平安時代古辞書についての実証的研究」、北海道大学博士論文
- 使用したテキスト
- 大治三年蔵本(『古辞書音義集成「一切経音義」』、汲古書院、一九八一年)
- 広島大学蔵本(同上)
- 天理図書館本(同上)
- 大阪金剛寺蔵本(『日本古写経善本叢刊第一輯「玄応撰一切経音義二十五卷」』、国際佛教学大学院大学学術フロンティア実行委員会編集発行、二〇〇六年)
- 名古屋七寺蔵本(同上)

西方寺蔵本（同上）

京都大学蔵本（同上）

東京大学蔵本（同上）

高麗蔵経本（『高麗大藏經』、東国大学校、一九七六年。『高麗大藏經初刻本輯刊』、

西南師範大学出版社、人民出版社、二〇一二年）

## 註

- (1) 日本古写本は書写の年代と地域によって、内容に多少の差がある。筆者（二〇一八）は、既に日本古写本の九種類を三つの系統（大治本系統・高麗本系統・石山寺本系統）に分類している。
- (2) 石塚晴通・池田証寿（一九九二）「レニングラード本一切経音義―Φ二三〇を中心にして―」（『訓点語と訓点資料』八六集、訓点語学会）による。
- (3) 同上
- (4) 同上
- (5) ただし、卷六では他本にない項目がある。
- (6) 欠…写本の欠損である。
- (7) 例十八では、玄心音義諸本の注文が異なっている。さらに、Φ二三〇と不一致する。
- (8) 原文ママ。掲出字を含む一行分が脱落している。

この論文は中国国家社科基金項目 20CYY024 による研究成果の一部である。